

回復期リハビリテーション病棟における転倒転落と身体抑制の現状

ーリスク管理手段として身体抑制は適切なのかー

三ツ倉裕子¹⁾ 高橋陽子¹⁾ 美原盤²⁾

1)脳血管研究所美原記念病院 看護部

2)脳血管研究所美原記念病院 院長

[はじめに]回復期リハビリテーション病棟で最も多く発生するアクシデントは、転倒転落と報告されている。当院では、入院時のアセスメント、カンファレンスの充実により、平成 25 年度の転倒転落による骨折は 0 件であった。しかし、やむなく身体抑制を行っている実態もある。そこで今回、転倒転落と抑制の現状を調査し、リスク管理手段として抑制は適切なのか検討した。

[方法]平成 22 年度～25 年度に発生した転倒転落事故件数、抑制実施率、抑制実施理由、転倒転落防止目的の抑制解除までの期間を調査した。

[結果]転倒転落発生件数は 22 年度 254 件、23 年度 140 件、24 年度 187 件、25 年度 187 件、うち、骨折などの受傷は 11 件、6 件、4 件、0 件であった。抑制実施率は 11.4%、7.3%、7.1%、7.0%、うち、転倒転落防止目的の抑制は 31%、17%、20%、22%、転倒転落防止目的の抑制解除までの期間は 33.5 ± 28.3 日、 17 ± 12.5 日、 10 ± 22.2 日、 4 ± 22.7 日であった。

[考察]平成 23 年 2 月より転倒未遂レベルでのカンファレンスを実施した結果、転倒に至る件数は減少、抑制率も経年的に低下した。転倒転落防止目的の抑制は一定数あるものの、解除までの日数は短縮し、重大事故発生数も減少した。転倒転落に対するリスク管理手段として抑制は必ずしも有効とは言えず、いかに抑制をしないようなケアを実践するかが課題である。